

山行報告

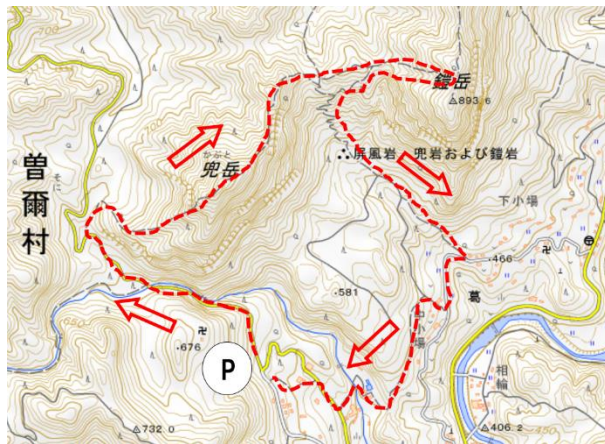
10月22日

兜岳・鎧岳

木田 修司

山名	兜岳・鎧岳	山行名	個人山行
ルート	駐車場 → 兜岳 → 鎧岳 → ヒダリマキガヤ群生地 → 駐車場		
山行日	2021年10月22日(金)	天候	曇りのち晴れ
参加者	CL:木田 SL:永井 女性:秋山、上杉、倉光、北條 男性:佐々木、田中(正)	女性4名、男性4名 計8名	

ルート概略図



コースタイム

地名	発着	時:分
	京田辺市三山木	発
登山出発(駐車場所)	発	09:15
兜岳	着	10:35
	発	10:50
鎧岳(昼食)	着	12:00
	発	12:40
下山(駐車場所)	着	14:25
京田辺市三山木	着	17:50

今回の例会山行は、緊急事態宣言が9月末で解除されているが、10月まで個人山行としての取扱いとなった。山行の前日は、天候を心配した参加者から確認の連絡があるなど降雨を心配する状況だったが、大きく崩れることは無いと判断して催行を決定した。運よく当日は不安のない天候となった。

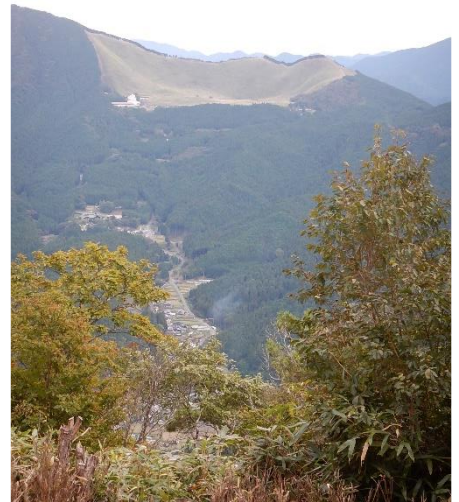
出発前のルート説明では、バランスを崩して転落すると一巻の終わりといった絶壁があり、しかも笹などの低木で覆い隠されていることを強調して、危険箇所では細心の注意をお願いした。準備体操を少し丁寧にして登山口に向かっていくと、目の前にこれから登る兜岳と鎧岳が見え、「ここに登るのか(登れるのか?)」との声が聞こえてくる。「正面からでは無理でも、道は表だけではなく裏道もあるなどと」と説明。足下に「長走りの滝」を見ながらの車道歩行は適度なウォーミングアップになった。登山口の取りつきでは下見をしながらも雨に流された山道に、多少もたついてしまった。下見時には、マーキングテープを持参するなどして確実なコースの確保をすべきだったと深く反省、今後に活かしたいと思う。

兜岳までは、急斜面と何箇所かのロープを伝いながらの山行であったが、特段問題なく登頂した。兜岳からの眺望は、紀伊山地の山々まで遠望でき、下山後の楽しみである曾爾高原の「お亀の湯」が、直ぐそこに確認できた。鎧岳からの眺望は余り期待できないことと、危険箇所の通過に向かうために、少し長めの休憩をとることにした。

今回の山行での一番の不安であった箇所は、転落防止というより危険箇所の目印といったほうがよいような、お粗末なロープが張られているだけで、恐る恐る覗いてみたい気になってしまう箇所である。ここを過ぎれば逢坂峠までは、足が届かないほどの急坂を一気に下るのであるが、参加者の皆さんは軽々と歩を進めていた。峠からの登り返しを経ての鎧岳は、正面からの山容を想像できないほど普通の登山道で他愛もなく登頂し、昼食となった。

鎧岳からの下山は、下見では行かなかった「ヒダリマキガヤ群生地」を見るために、金強神社からの山道へ回ったが、群生地の看板を確認しただけで、その生育確認には至らなかった。車道に出て、振り向くと「ここに登ったのか!」と、全員が納得できる「鎧岳」の雄姿があった。

ヒヤリハット : なし





感想

佐々木康治

奈良・奥香落谷（こおちだに）の兜・鎧、その特異な山容は中国桂林を思い出させる。漢字は読めるがいざ書けといわれると「ウン・・・チョット待って」と唸る。山容からすると鎧の方が兜(helmet)のよう、正面は人を寄せつけない垂直の絶壁だが18年前意外にあっさりと登頂できた記憶がある。

参加者8人、男4女4のシニア精鋭部隊、木田号、田中号に分乗、運転技術の卓越さに舌を巻きながら快適な気分で山麓着。チーフの木田さんの号令のもと準備運動、気合の入った屈伸の繰り返しに女性陣から賛嘆の声、「最近の山行では準備運動をなおざりにすることが多いのでチーフになった方は見習うべきだ」との誉め言葉。

「尾根筋は右側は断崖絶壁、落ちれば一巻の終わり、転倒・滑落するなら左側の方へ」とジェスチャー付きの注意を受けた後出発。「目無（めなし）地藏」の登り口周辺はササヤブ、少し迷ったが下見のおかげで何とかクリアーして登攀ルートへ。露岩の急坂が続きフィックスロープに助けられながらひたすら上へ上へ。兜岳山頂(920m)は平坦、展望は今一つ。折角上にあがったのに一旦峯坂（むねさか）峠までダウン、兜と同じような露岩、フィックスロープの急坂に悲鳴をあげながら鎧へ。鎧山頂(893.9m)からの眺めは最高、銀波のススキの曽爾高原、倶留尊（くろそ）、古光（こご）、住塚など過去に登った懐かしい山々を俯瞰しながら至福の時を過ごす。

下山後、近くの「お亀の湯」で「♪い～い湯だな♪」と鼻歌、チーフの木田さん、サブの永井さん、運転して下さった木田さん、田中さんのおかげで極楽気分の山行ができたことに感謝しながら帰途につきました。

秋山 正子

この山は以前、登ったことがあったはずなのに覚えていませんでした。初めての気持ちでスタート、ですが、登り始めてびっくり。本当に登山道なの？と思うくらいハードなコースで、下見で大変、ご苦労されたとのことでした。途中、曾爾高原が見え、芝生のカールがとてもきれでした。下山し、アスファルトの道を歩きながら振り返り、あそこの山に登ったんだ！と感激するほど泰然とした山の姿にやったぜ！と写真を家族に送りました。天気も良く、気持ちのいい山行に加えて帰りのお亀のお湯が最高でした。

北條 都

曾爾高原はススキの草原が綺麗なところと思っていたのに、曾爾村にこんな山があったとは・・・。兜岳・鎧岳は、距離は短めだが、斜面が割と急で、所々に張られたロープを頼りに登るところがあったりして、結構面白い山でした。3日後に屋久島に行くトレーニングのため、10キロ弱のザックを久しぶりに担いで登ることに少し不安があったが、足がつることもなく無事に下山できた。登山後の温泉「お亀の湯」もいとお湯で最高でした。CLのKさん、SLのNさん、楽しい山に連れて行ってもらって感謝です。

倉光 展子

兜岳、鎧岳の登山を終えて、夫と二人地図を広げて、心のセンチメンタルジャーニーよろしく悦に浸っている。若い頃、“週末の気分転換“にと、夫と二人、車で走りまくったことを思い出した。宇陀川、室生川、青蓮寺川、名張川沿いもよく行ったところだ。兜岳、鎧岳はとても自分たちの“足”に負えるようなところでない、登ることなど思いつきもしなかった。通り過ぎるには申し訳ない、と二人はふもとの民宿に泊まり、その威風堂々の山容に恐れおののいて、下から仰ぎ見ることにした。その時、期待していなかった副産物をいただいた。暗い谷あいの村に、降ってくるような星々の天体ショーである。夫は「清少納言が『星は昴（スバル）』と書いたはずや」とうめいた。くっきりと、こうこうと暗黒の空に上ってきたスバルは夜空の宝石だった。今回、木田リーダーは、兜岳、鎧岳は下から見た目より、比較的簡単に登れる山と紹介してくださり、企画してくださった。感謝である。紅葉には少し早かったが、好転した天気のおかげで、青空をバックに、堂々として、美しかった。もう一つ素晴らしいところを紹介してくださった。行く前のアンケートで、「登山のあと、お亀の湯か曾爾高原か」の選択肢を問われて、私一人が曾爾高原と答えたらしい。一人で曾爾高原はもう一つ気がのらなかったのも、私も温泉にした。それが正解だった。お亀の湯は、程よくぬるぬるして、いい湯だった。青空の露天風呂に1時間ゆったり浸かって、満たされた登山を復習した。リーダー、サブリーダー、車を提供し長時間運転してくださったお二方、同行の皆様、いろいろお世話になり、ありがとうございました。